

わ じん

# 4. 和人とのかかわり

こう えき

## 交易とアイヌ文化

地域産業  
国際理解  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



(上)シントコ。

タマサイを首にかけて正装してムツクルを演奏する川上げざ子さん。(上土幌町・東泉園)

トウキ。上にイクバ イタンキ。ふだんのスィが乗っている。使ったおわん。(器は帯広百年記念館：1)

擦文文化からアイヌ文化に移っていくと、刃物や矢の先につけるヤジリ、また、煮炊きするためのなべなどが、石器や土器ではなく鉄製となりました。

鉄製品は、本州（や北海道南部）にすむ「和人」から手に入れました。それらをそのまま使ったり、別のものに作り直したりしていたのです。

カムイノミ（神への祈り）などの儀式やふだんの暮らしで使われる、「シントコ」「トウキ」「イタンキ」といったうるしぬりの器も本州から手に入れました。

また、儀式の時に男性が着る「陣羽織」、女性が身につける「タマサイ（首かざり）」のガラス玉や鏡などは、大陸や本州から手に入れていました。（ p112）

そのほか、和人から手に入れたものには、木綿の布、米、酒、タバコ、針などがあります。

### 北海道からの「輸出品」

アイヌの人々は、本州や大陸のものを手に入れる時、交かんに北海道の産物をわたしました。

ワシ・タカの羽やアザラシの毛皮は、古くから、本州で高級品として喜ばれています。そのほか、クマやシカなど動物の毛皮、干したサケ、コンブ、あるいはアットウシ（木のせんいで織られた布・服）などが和人にわたされました。

また、サハリンを通して手に入る大陸の絹織物（蝦夷錦）などが、アイヌ民族の手をへて和人の手に、反対に和人からアイヌ民族の手に入ったものが、サハリンを通じて大陸にまでわたりもしました。



(上)オオタカ。羽は矢羽として、またオオタカ自体が鷹狩りのために求められた。



タカ(オオタカかハイタカ)の羽。

### 大切な交易が...

儀式から暮らしまで、アイヌ文化の成り立ちにとって、交易はとても大きな意味がありました。

一方、和人にとって、アイヌ民族から手に入るものは、めずらしく貴重なもので、豊かな人々にとって人気の的であり、商売すればもうかるものでした。

これを商売にした和人は、もうかってもうまくいなくても、もっともうけたくになります。そのためには、何をしてもいいと考える人が出てきます。

大切な交易は、やがて、アイヌ民族を大きく苦しめることにもつながっていきました。



浦幌町、昆布刈石の海岸。アイヌ語で「コンブ・カルウシ=コンブをいつもとるところ」。

1 帯広百年記念館(おひひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館  
2 北海道からの輸出品(ほっかいどうからのゆしゅつひん): 18世紀にはいと、瀬戸内

海産の塩がたくさん北海道にやって来ることによって、サケの塩引きの「輸出」が多くなる。これは、江戸など東日本の食生活に変化を与えた。また、コンブなどの「輸出」も増え、これは長崎を通じて日本国外へも再輸出された。

# まつまえはん こうえき し はい ばしょ 松前藩の交易支配と「場所」



江戸時代の北海道の大まかな区分。アイヌ民族の土地(蝦夷地)は東西(太平洋側と日本海側)に分けられた。松前藩の支配地(和人地)が16世紀中ごろ(p113)より拡大している。(『アイヌの歴史と文化』より、改変)

15世紀になると、渡島半島では、本州からわたってきた和人たちが支配を強め、アイヌ民族との戦闘(コシャマインの戦いなど: p113)が起きていました。

和人の中に、コシャマインを破った武田信伝の子孫である蠣崎氏がいました。蠣崎氏は、こうした戦いなどを通じて、渡島半島西南部の和人たちを従えていきます。

16世紀末、蠣崎氏は豊臣秀吉に認められ、蝦夷支配者の安藤氏から自立し、続いて「松前氏」となりました。

1604年、江戸幕府の将軍・徳川家康が、松前氏に対して「黒印状」を出し、アイヌ民族と和人の交易について管理権をあたえます。こうして松前藩が成立しました。

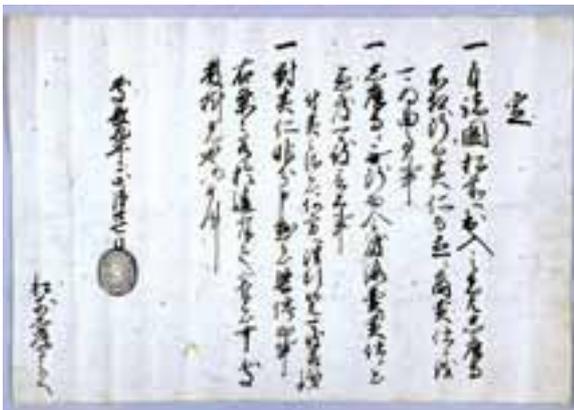
松前藩は和人の土地(和人地)とアイヌの土地(蝦夷地)を分け、和人が蝦夷地に定住することを禁じました。

## まつまえはん こうえき どりくせん 松前藩の交易独占

松前藩は、はじめ、アイヌの人と本州商人の交易地を松前城下に限ります。続いて、アイヌの人と本州商人が直接交易することを禁じ、北海道産物をすべて、松前藩が独占してから和人商人に売りわたすこととしました。

本州以南のほとんどの藩が、農民に米を年貢として納めさせることで成り立っていましたが、松前藩は、アイヌ民族の産物の入手・販売を独占することによって(あるいは金の採取によって)成り立っていたのです。

それまで、アイヌの人々は自由に和人と交易をしていたのですが、これ以降できなくなりました。



徳川家康の黒印状。(北海道開拓記念館蔵)

## こうえき ち ばしょ 北海道各地にできた交易地「場所」

その後、交易は松前城下ではなく、北海道各地に船を送り、蝦夷地の海ぞいでおこなうようになります。

交易は、北海道を地方ごとに区切っておこなわれました。その範囲は「商場」あるいは「場所」と呼ばれ、それぞれを、位の高い家臣が管理しました。

十勝地方は「トカチ場所」とされました。松前藩からは、本州商人から手に入れたものを積みこんだ船がそれぞれの「場所」にやって来て、そこでアイヌの人のとった産物との交かんがおこなわれます。

あるいは、鷹狩り用のタカをつかまえる人や砂金をほる人が、各地に送りこまれてもしました。

こうして手に入った産物を船で松前まで運び、そこで本州商人に売ること、松前藩は利益を得ました。



「場所」区分。時期によって変わる。この図は比較的あとのようす。場所名は一部分だけ。(松前蝦夷場所一覧図『北海道場所請負制度の研究』より、改変)

3 安藤氏(あんどうし): 津軽(つがる)地方を支配した武家・豪族。鎌倉～室町時代に北の支配者として、北海道南部まで影響力を持った。室町以降は「安東氏」ともされる。  
4 黒印状(くろいんじょう): ここには、ほかに、アイヌ民族の行動の自由や、アイヌ民族

に対してひどいことをしてはいけないことも書かれていた。  
5 自由な交易(じゆうなこうえき): 1644年ころまでは、北海道太平洋側のアイヌの人が青森県の下北半島まで行っていた。(『アイヌの歴史と文化』より)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

# シャクシャインの戦い

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



17世紀前半ころまでに、金がとられるようになったところ(●)。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

松前藩の交易支配が始まり、「場所」(p137)が決ま  
れ、アイヌ民族は自由な交易ができなくなっています。

「場所」によっては、アイヌの産物が松前藩によって安  
く買いたたかれます。例えば、それまで干しザケ100本に  
対して、米を2斗受け取っていたものが、0.7~0.8斗と三  
分の一近くにまで安くされることもありました。

また、強制的に大量の産物を約束させられ、出せなけれ  
ば子どもを人質に取られる、といったことまで、おこなわ  
れたようです。

さらに、松前藩にとって大きな収入源であった、タカと  
砂金をとりに、和人たちがアイヌ民族が生活しているところ  
に入りこみはじめます。十勝でも1635年には、歴舟川下  
流周辺(大樹町)などで砂金とりがおこなわれています。

こうした、和人のひどいやり方や、生活地域への侵入が、  
各地でアイヌ民族を苦しめていきました。



シャクシャインとオニビシの力の広がり。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

## 始まりはアイヌ民族同士の争い

1648年のころから、シベチャリ(新ひだか町静内)地方の人た  
ちとハエ(日高町門別)地方の人たちが、アイヌ民族同士で争い  
を続けていました。狩りや漁をする範囲(イオル)の争いでした。

1653年には、シベチャリのリーダーであるカモクタインが殺さ  
れ、1668年には、ハエのリーダーであるオニビシが、シベチャリ  
の新リーダーとなったシャクシャインたちによって殺されます。

そんな中、1669年、オニビシの親せきであるウタフが、松前藩  
に武器などの援助をたのみに行きますが、断られます。その帰り、  
ウタフは死んでしまいます。病死だったようですが、アイヌ  
の人々には、松前藩による「毒殺」だと伝わりました。

## シャクシャインの呼びかけから

ウタフ「毒殺」を聞いたアイヌ民族には、和人に対する  
不安が広がります。もともと、和人のやり方への不満やい  
かりもありました。そこへ、シャクシャインが、

「アイヌ同士の争いはやめ、ひどいことをし続ける和人  
に対して戦おう」と広く呼びかけました。

1669年6月から7月にかけて、東は白糠周辺、北は増毛  
周辺に至るまで、アイヌ民族が和人に対して戦いを始めま  
した。十勝でも戦いが起き、和人ら20人が殺されました。

これに対して江戸幕府は、松前藩だけでなく、弘前藩な  
ど東北地方の藩に対しても出兵を、またはその準備をする  
よう、命令を出しました。



●: 和人がおそわれたところ。地名は地方や「場所」の拠点名。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

1 2斗(2と): 今、1斗=約18リットルなので、2斗は約36リットル。時代や地方に  
よって少しずつ変化する。ちなみに1斗=10升(しょう)、1升=10合(ごう)、米10kgが  
約6.6升なので、2斗は10kg入りの米袋、約3袋分。

まつまえはん はんげき  
松前藩の反撃

7月末、松前藩は鉄砲をそろえ、オシャマンベ（長万部）までせめこみますが、アイヌ軍は山中にかくれて毒矢を放ちます。

せめあぐねた松前藩軍は、クヌイ（国縫・長万部町）までしりぞきました。

9月、松前藩は軍を増強し、海をわたるなどして総攻撃を始めます。それと同時に、松前藩とかかわりの深いアイヌ民族に対して、個別におどしをかけ、切りはなしては降伏させていきます。

アイヌ軍は分断され、シャクシャイン勢は追いつめられていきました。



オシャマンベ(長万部)、クヌイ(長万部町国縫)、シベチャリ(新ひだか町静内)と、シャクシャインが殺されたピボク(新冠町字高江)。(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

だまし討ちで殺されたシャクシャイン

10月、松前藩軍は、シベチャリ（新ひだか町静内）のシャクシャインに対し、静内川・新冠川をはさんだピボク（新冠町）に陣地を張ります。現地指揮官である佐藤権左衛門はシャクシャインに対し、戦いをやめることを提案します。シャクシャインは迷いますが、受け入れることにしました。

その夜、シャクシャインらは「仲直り」の宴会に招かれます。シャクシャインとその供たちが酒に酔ったところを、突然、松前藩兵が取り囲んで殺しました。だまし討ちだったのです。

そして権左衛門らは、次の日、シャクシャインのチャシ（砦）： p116）を一気にせめ、焼きはらいました。

その後、アイヌ側の勢いは弱まっていきます。翌々年の1671年春、ついにシャクシャインの戦いは終わりました。



もう少し細かいこと

寒かったところで、噴火もあった

16～17世紀ころは、その前後に比べて寒い時期でした。この時期は「小氷期」と呼ばれています。( p103)

また、1640年には駒ヶ岳（鹿部町・森町）が、1663年には有珠山（壮瞥町・洞爺湖町・伊達市）が、1667年には樽前山（千歳市・苫小牧市）が噴火をし、多くの死者が出ています。とくに樽前山の噴火は、その火山灰が十勝まで飛んできているほどの大きな噴火でした ( p61)。

これらのことは、北海道の自然に対しても影響があったでしょう。自然とともに生きるアイヌ民族にとって、物質的にも精神的にもダメージがあったのではないのでしょうか。

あくまで想像ですが、松前藩による交易独占などの政策のほか、こうした自然現象も、シャクシャインの戦いが起きる背景となっていたのかも知れません。

新ひだか町の「シャクシャイン記念館」

シャクシャインの本拠地であったシベチャリ（静内）は、今の新ひだか町にあります。

この新ひだか町静内真歌の真歌公園には「シャクシャイン記念館」や「アイヌ民俗資料館」もあり、静内を中心としたアイヌ文化について知ることができます。

また毎年、「シャクシャイン法要祭」がおこなわれています。



シャクシャイン記念館。



アイヌ民俗資料館。

2 だまし討ち(だましうち): だまし討ちは、アイヌ民族との戦いで、和人が何度もおこなっている。松前氏となる前の蠣崎 かきざき 氏は、1515年のショヤコウジ兄弟との戦いの時に、また、1536年のタリコナとの戦いの時に、いずれも仲直りを呼びかけ、その祝い

の場でごちそうや酒をふるまい、よったところでせめこみ殺している。同じようなことは、四国の土佐藩(高知県)でも起きていて、よその土地から来て支配者となった山内氏が、地元の有能な武士を相撲大会に呼びだし、そこでみな殺しにしている。

# 「場所」での支配の「民営化」

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



「オムシャ」。オムシャはもともとは、和人がアイヌ地(蝦夷地)に来て交易する時の儀式だった。シャクシャインの戦い後、松前藩がアイヌ民族を支配するための行事となった。(『日高アイヌ・オムシャの図』 函館市中央図書館蔵)

シャクシャインの戦いののち、松前藩によるアイヌ民族支配はきびしくなりました。

これまで、アイヌ民族は松前藩から独立した身分だったのですが、松前藩主に従うことを誓わされました。

北海道各地の交易地であった「場所」についても、変化がありました。

松前藩の上級家臣が直接支配するのではなく、商人に「場所」をまかせて、かわりに毎年一定のお金を受け取るやり方(場所請負制度)に変わっていったのです。

十勝にあった「トカチ場所」でも、18世紀前半ころに、商人による支配が始まりました。

トカチ場所の拠点は、はじめトカチ(十勝太:浦幌町)にありましたが、その後ピロウ(広尾)に移ります。

年	支配商人(場所請負人)
18世紀末	濱屋久七
"	栖原角兵衛
1799~1811	(幕府の直接支配)
1812	近江屋上田三郎次
1819	大阪屋卯助
1825	福嶋屋嘉七
1841	福嶋屋清兵衛
1854 (~1869 = 明治2年)	福嶋屋杉浦嘉七

18世紀末より、トカチ場所を支配した商人(場所請負人)。  
 (『蝦夷草紙別録』、『栖原角兵衛履歴』、『場所請負人及運上金(河野常吉)』、『十勝川の川舟文化史 濤標』、『新北海道史年表』より)

## 商人による「場所」の支配

商人にとっては、もうけることが一番大切なことです。ものを交かんする交易よりも人をやとって働かせた方が、ほしいものをたくさん手に入れやすく、命令しやすくなり、もうけやすくなります(失敗すると損も大きくなります)。

アイヌの人々は、自分たちの意志で狩りや漁をしていた状態から、商人にやとわれるようになりました。商人の命令で、漁をさせられ、産物加工をさせられるようになっていったのです。

一方で、商人には、アイヌの人が苦しんだり困ったりしないように、との指示も出されていました。1789年には十勝川が凶漁で、飢え死にする人が出たため、当時の支配商人・栖原角兵衛は救助米を出して、アイヌの人100人を助けたといわれています。

## 「場所」で行われたひどい支配

すべてのアイヌの人たちが、商人に使われてばかりいたわけではなく、自分で漁をした魚を商人に売る人もいたようです。

しかし、多くの「場所」では、自分でとった魚のうち2割を商人に納める「二八取」をさせられたり、商人の漁場にやとわれた人が一年中働かされ、家族の待つコタン(集落)へ帰れなかったりするなど、ひどい支配がおこなわれました。

中でも、クナシリ(国後島)とメナシ(東部・知床や根室など)では、支配商人の飛騨屋らが、アイヌの人を安い労賃で冬のたくわえもできないほど働かせ(飢え死にする人も)働きが悪いといってマキでたたき殺したり、アイヌ女性に乱暴するなど、めちゃくちゃなことがまかり通っていました。



アイヌ文化期の北海道の東部(メナシ)と国後島(クナシリ)。

## クナシリ・メナシアイヌの戦い

1789年、こうしたひどい状態であったクナシリで、マメキリの妻とサンキチというアイヌの2人が、和人からもらったものを口にしたあと、相次いで死にました。

これをきっかけに、クナシリの若手アイヌら130名が立ち上がり、飛騨屋支配人らをおそいます。襲撃は対岸のメナシ地方にも広がり、71人の和人が殺されました。

松前藩は260人の兵をこの地に送り、協力的なアイヌの長らを通じて彼らをなだめ、ノッカマップ（根室市）に集めます。

しかし、松前藩兵は集まった人たちをとらえると、「飛騨屋もひどいことをしていたが、うったえもせず多くの人を殺したことは許せない」として、殺害をおこなった37人に対して死罪をいいたしました。

数人の首が斬られたあと、さわいだ牢の中の人たちは鉄砲で撃たれ、逃げようとした人はやりでつかれ、37人全員が殺されました。



1789年、クナシリ・メナシアイヌの戦いが起きた北海道東部。  
●：和人をおそったところ。死刑はノッカマップ（根室市）でおこなわれた。  
（『アイヌの歴史と文化』より、改変）

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

## 「トカチ場所」での産物

1739年ころ、トカチ場所では、干したサケ、ワシ・タカの羽、塩づけのツル、シカの皮、クマの皮などがおもな産物でした（『蝦夷商賣聞書』）。

1808年ころの産物としては、フノリ、コンブ、ブリ、タラ、カスベ（エイ）、カレイ、サメの皮、アツシ（アットウシ：木の皮のせんで作った服・布）などがあります。オシラベツ（音調津：広尾町）、ピロウ（広尾）などではコンブがとられ、タンネイソ（タンネソ：広尾町）では、フノリがとられていました（『東蝦夷地各場所様子大概書』）。

さらに、1854～1856年ころには、サケ、マス、イワシ、ブリ、煮たナマコ、コンブ、フノリ、シカの皮、クマ（の皮？）、ワシ、材木〔モミ・エゾマツ・ツガ〕（『松前蝦夷地場所請負制度の研究』『蝦夷行程記』）などが、トカチ場所の産物として記録されています。



(上)北海道のツル、タンチョウ（サロルンカムイ）。塩づけにされ交易品とされた。



(上)北海道のシカ、エゾシカ(ユク)。



(右)「アットウシ」。オヒョウ（アソビウ）という木の皮のせんで作られる服。

(上土幌ウタリ文化伝承保存会 上土幌町・東泉園)

## 生活の一部となる「やとわれ仕事」

アイヌの人々にとって、和人との交易は大切なことです。その交易相手の和人が、ものだけではなく「やとわれ仕事（労働）」を求めるようになりました。

強制され、どれいのようにあつかわれることもあり、それほどでもない場合でも、かなり安くやとわれていたようです。

やがて、和人商人のもとで仕事をするのが、多くのアイヌの人々にとって、生活の一部となっていきました。

した。

あまりひどい支配がおこなわれない「場所」では、春から秋にかけて、若者や働きざかりの男女が、海岸の漁場などへ「やとわれ」に出ます。そして、秋から冬にはコタンに帰り、動物の狩りをおこなう、という生活のサイクルができあがっていったようです。

「やとわれ仕事」の期間、内陸のコタン（集落）には、老人と子ども、それに母親らが残されていました。

1 ノッカマップ：アイヌの人37人が処刑された、根室半島のノッカマップでは、昭和49年（1974）から毎年、アイヌの人たちが中心になって「イチャルバ」という供養祭（くようさい）をおこなっている。クナシリ（国後島）を見わたす海岸の丘にイナウ（カム

イ【神】にささげる木製の祭祀具【さいしく】が立てられ、伝統的な方法によっておこなわれる。この翌日、「飛騨屋の71人はアイヌの人々を苦しめた者たちだが、犠牲者（ぎせいしゃ）には変わらない」として、和人に対してイチャルバがおこなわれる。

# 「探検」される十勝

国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



1800年、皆川周太夫が十勝川をのぼってきて上陸した場所。旧帯広川・パラプト(帯広市東10条南4丁目)。

17世紀、ロシアは清(今の中国)との戦いに敗れ、サハリンへの南下をいったんあきらめ、シベリアを東に進みカムチャツカにまで領土を広げました。そして、18世紀中ごろには、千島列島南部にまで南下してきています。

これを知った江戸幕府は、北海道を対ロシアの前線と見なして、北海道、千島列島の調査を始めます。

また、1799年から北海道の太平洋側を、1808年には北海道全体を直接支配するようになりました。

1807年には、エトロフ(択捉島)で幕府兵(南部・津軽藩士)とロシア人が武力衝突しています。

1821年、北海道は松前藩支配にもどりませんが、1854年、再び幕府が直接支配し、幕府がたおれるまで続きます。

名前	十勝に来た年
最上 徳内	1786
近藤 重蔵	1798
渋江 長伯	1799
伊能 忠敬	1800
皆川周太夫	1800
磯谷 則吉	1801
今井八九郎	1828
松浦武四郎	1845・1856・1858
窪田 子蔵	1856
成石 修	1857

## 探検家たち

1785年から幕府の北海道調査が始まります。

1785～86年には最上徳内が、日高・十勝・釧路・厚岸・国後島・択捉島・ウルップ島にやってきました。彼はアイヌの人の生活にだけこみ、1791年にはアイヌ民族救済のために、再びやってきます。

日本の測量で有名な伊能忠敬は、1800年に函館から十勝・釧路までの海岸線を測量していきました。

同じく1800年には皆川周太夫が虻田を出発し、大津(豊頃町)から十勝川をさかのぼって、内陸を調査しました。帯広にも寄っていて、パラプト(旧帯広川・水光園近く)で上陸し、アイヌの人の家に泊めてもらっています。その後、ニトマップ(人舞・清水町)から山をこえて、日高地方の沙流川上流に出ていきました。

幕末に十勝をおとずれたおもな探検家や旅行者。

## 幕末最大の探検家「松浦武四郎」

1845～1858年までの間に、6回も北海道を旅したのが、松浦武四郎です。十勝へもきて、十勝川や歴舟川ぞいなどを歩き調べています。「北海道」という名前を考えた人です。

アイヌ女性に当時貴重だった針をプレゼントするなど、心配りをする人で、アイヌの人々に信頼され、アイヌ文化をよく理解した人でもありました。アイヌに対する和人のひどい支配もふくめて、北海道について細かく記録を残しています。

これら「探検家」は、見方を変えれば、アイヌ民族が暮らす土地に入りこんできた人たちです。

彼らは、アイヌの人々に案内をたのみ、地名や情報を教えてもらうほか、川を行き来する時はチッ(丸木舟)に乗せてもらい、夜にはチセ(家)に泊めてもらうなど、さまざまな手助けをってもらうことで、調査をすることができたのです。



松浦武四郎による十勝の図。十勝川河口からヤムワッカヒラ(幕別本町)のあたりまで。(『東西蝦夷山川地理取調図』より)

1 松浦武四郎(まつうらたけしろう): 心配りがある上、何よりその人がらがよかったようである。相手のすぐれたところを素直に尊敬し、理にかんがってれば同行した和人の役人よりもアイヌの長(おさ)の意見をとり、体調が悪くても宴会につきあい、お礼

を忘れず、やとった案内人に対しても思いやりをもって意見を尊重する。同時に、するどい観察力があり、わずかな滞在記録の中から当時の問題点がうかび上がってくる。記録・報告書には、あたたかみやユーモアがあり、すぐれたエッセーともなっている。

かいたくしゃ

# 開拓者をむかえ入れるアイヌ民族



明治2年(1869)、北海道は11国に、明治15年(1882)からは「札幌県」「函館県」「根室県」の3県に分けられた。1つの「国」が別の県に入っている。

江戸幕府がたおれ、1868年、明治新政府ができます。明治2年(1869) 十勝は静岡藩・一橋家・田安家などの支配地となり、明治4年(1871)には、北海道全体が「開拓使」の管理地となります。

明治15年(1882)には開拓使がなくなり、十勝は「札幌県」の一部になります。明治19年(1886)、北海道全体が「北海道庁」の管理下に置かれました。( p156)

こうした中で、本州からの和人が海ぞいの大津(豊頃町)などに移住し、さらに十勝の内陸に移住を始めます。

明治12年(1879)には、馬場猪之吉がオベリベリ(帯広市)の長であるモチャロクのところに仮住まいしたあと、モッケナシ(音更町)に移住しました。( p158)

## 開拓者を助けるアイヌの人々

明治16年(1883) 依田勉三・鈴木銃太郎・渡辺勝に率いられた「晩成社」が13戸27人とともに集団でオベリベリ(帯広市)に移住、林を切り開いて農場づくりを始めます。

当時はまだ、十勝川などの川が交通路の中心で、陸にはふみわけ道があるくらいでした。晩成社の人もほかの移住者たちも、大津との間は、十勝川を舟で行き来します。

この舟は、アイヌの人があやつる「チブ(丸木舟)」でした。

アイヌの人々は、こうした交通のほか、道案内、入地当初の家や食べ物など、開拓者たちが暮らしを始めるのに必要なものや情報を、ある時は好意で、ある時は労賃と引きかえに、あたえたのです。( チブ p128)( 移住者 p158)



アイヌの人があやつるチブ(丸木舟)に乗って川をのぼる開拓者。(蓋派(池田町大森)に入植した、上徳善七が描かせたもの) (上徳善司氏蔵)

## アイヌ民族と晩成社

晩成社は火事を起こすなどして、オベリベリのアイヌの人々ともめもします。しかし、その後、おわびの宴会をするなど、うまくつき合っていくことになりました。

幹部の一人、鈴木銃太郎は、アイランゲ、ウインコトレらのアイヌの人たちと仲良くなり、サケやマスをもったり、米をあげたり、農場の手伝いをしてもらったり、酒を飲んだり、深いつきあいを続け、アイヌの女性と結婚します。

サケが禁漁となったため、アイヌの人々が食べるものに困った時には、銃太郎と渡辺勝が調査し、当時大津にあった役場や札幌県に「アイヌ救済」をうったえもします。( p146)

それとともに、アイヌ民族への農業指導などもおこない、共に生きていく方法をさぐりました。( p147)



晩成社幹部の一人、渡辺勝の家があったところ(帯広市東10南5)。勝の妻カネは、同じく晩成社幹部だった鈴木銃太郎の妹だった。(市民大学講座・東小地区コミュニティ講座「帯広発祥の地めぐり」)

2 アイヌ民族と晩成社(あいぬみんぞくとばんせいしゃ): 晩成社の幹部たち、とくに鈴木銃太郎と渡辺勝・カネは、キリスト教徒でありインテリでもあった。当時の日本や世界の情勢からすると、アイヌ民族も近代化しないと民族として生きていけない、と考

えていたと思われる。しかし、開拓の進行や近代化自体がアイヌ文化をこわし、民族の危機をもたらすことまでは想像できなかった。その後、晩成社の経営はほとんどが失敗に終わってしまう。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん